渡来人と手工業生産の展開

植野浩三

はじめに

五世紀代の古墳時代文化の発展は、五世紀前半代に新たにもたらされた渡来文化の影響がきわめて重要な役割を果たしたことは、すでに説かれているところである。それは、各種技術に留まらず、墓制や諸制度、生活様式の一部においても認められ、渡来人の直接的な関与や影響、そして間接的な影響によって展開したもの等、多方面にわたる。

このうち手工業生産においては、須恵器生産と鉄生産を中心とする金属器生産が考古学の分野では明らかになってきており、後で触れるように土木技術や、その他の生業・技術の面においてもその存在が確認されつつある。

須恵器生産の開始が渡来人と密接な関係にあったことは、すでに文献史料の側からも推測されている。その代表的なものは、『雄略紀』七年条にある「今来才伎」渡来記事であり、「新漢陶部高貴」の記載から須恵器生産に陶部高貴が関わったことが予測され、古くはこの頃に生産が開始したであろうという年代論も指摘されてきた。また、年代的な信憑性をもつが、『垂仁紀』三年条の天日槍渡来伝説の中にある「近江国鏡村谷陶人、即天日槍之従人也」の記事は、須恵器生産に渡来人が関わりをもったことを伝えた内容として高く評価されてきた。こうした経緯からも、須恵器生産が渡来人によってもたらされたことは暗黙の了解事項として認識されてきた。

須恵器生産の技術は日本で定着して以降、各地で展開していき、六世紀代以降は全国的展開している。初期においては、渡来時の窯跡や須恵器が次第にあるいは急激に変化して日本化が進み、定型化を迎えて行く方向性が示されている。しかしこうした須恵器の変遷が示される一方で、実際に生産に携わった渡来人の様相やその推移については、さほど明らかにされていないのが現状である。須恵器生産自身は渡来人の主導の元に成立して継続するが、それに従事した渡来人の集落の様相や渡来的要素の整理・比較といった総合的な把握は途に着いた状況である。そして、渡来的要素の動向と生産組織の相関関係についても未解明の部分が多いといえる。

したがって本稿は、近年の調査資料を参考にしつつ、窯跡と須恵器、そして集落遺跡について渡来的要素のあり方を再整理してその推移を探り、生産に携わった渡来人の動向やその要因について検討する。加えて、渡来人の動向と生産の展開、生産組織の変化について関連させて考察していきたい。尚、本稿では、大阪・陶邑窯と周辺の地域について中心的に取り扱い、他地域については適時触れることとし、渡来人の動向が詳細につかめる5世紀代を主にとりあげていくことにする。

一、窯跡にみられる渡来的要素

日本における須恵器生産の開始と展開は、大阪・陶邑窯の調査や、各地での窯跡調査によってほぼ明らかになっている。筆者もすでに示している（植野一九九三ａ）ために詳細は記さないが、その開始と変遷は次のようになる。

まず、須恵器生産成立以前に造られた窯として神戸市出合窯跡がある。比較的小規模な窯が一基検出されている。これは、突発的に短期間の生産が行われたものであり、瓦質的な土器を主流に生産している。時期も四世紀以前である。当然、渡来人そのものによる渡来色の強い操業であり、こうした窯が他地域にも存在する可能性は捨てきれないが、本格的な須恵器生産とは性格を異にしているため、本稿では取り扱わない。

本格的な生産の始まりは、ＴＧ二三二型式段階を初現期として、直接渡来した工人によって近畿（陶邑・千里・一須賀）、九州（朝倉・隈西小田・居屋敷）、中国（奥ヶ谷）、四国（三郎池西岸）の地域において生産が開始しており、その他、東海地方のように同時期に存在した可能性が高い地域も多くある。こうした分散的な状況は、ヤマト政権や朝鮮半島の交渉に直接関与あるいはその役職を担った豪族もしくはその関係者が、自らの本拠地おいて渡来人を直接招聘あるいは受容し、いち早く生産を開始したことを示していると考えられる。各窯の間には、微妙な時期差は存在すると考えられるが、概ねＴＧ二三二型式段階として捉えて間違いなかろう。

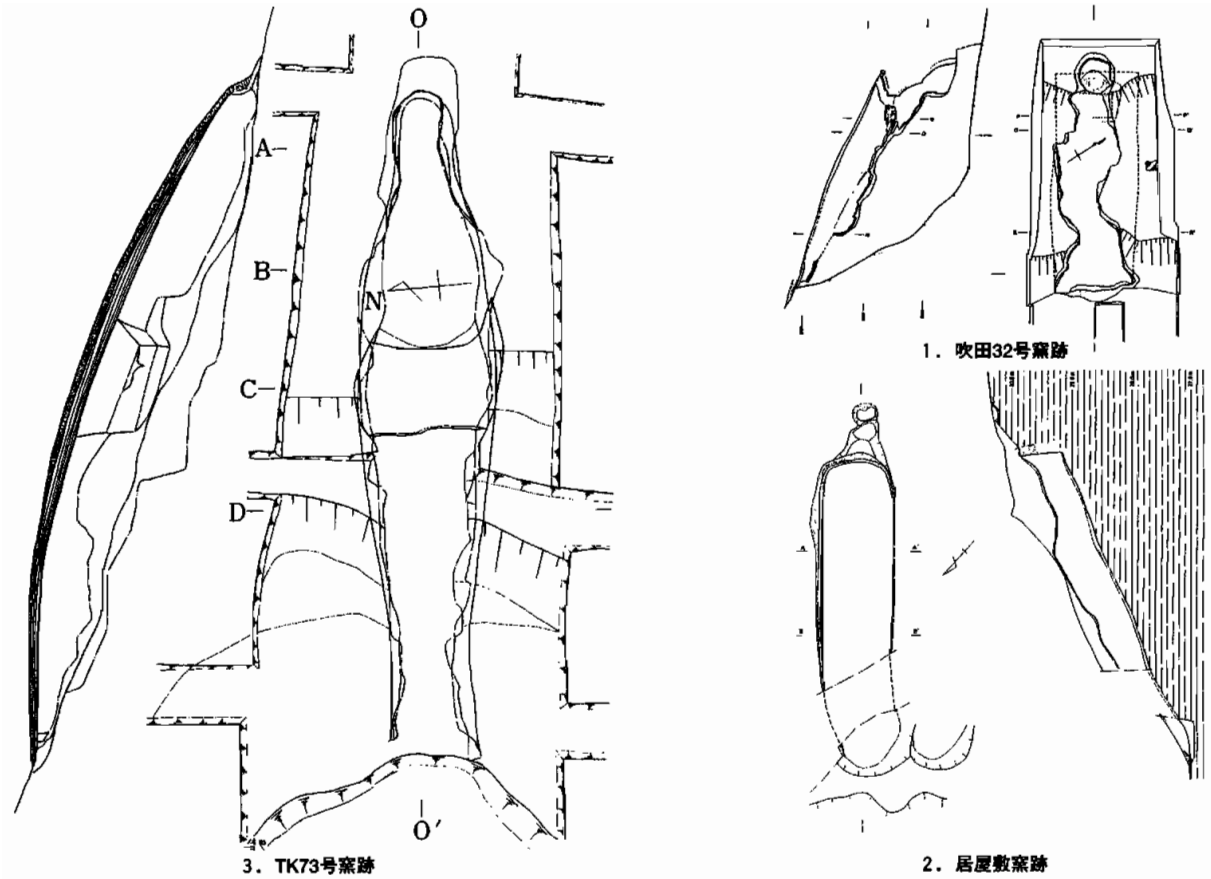
筆者はこの期の窯を、渡来型として位置づけている。言うまでもなく、直接渡来してきた工人よって生産を開始した段階である。陶邑窯の大庭寺遺跡ＴＧ二三一・二三二窯跡がその代表であり、この窯では多種多様な須恵器を製作している。朝鮮半島での系譜が未解明のものも多く含まれるが、渡来人の技術を駆使した須恵器作りが最も読みとれる時期である。出土須恵器の中には、稚拙なものや高杯などに土師器的な手法を用いた器形も多く存在するため、渡来人と倭人の協業も一部で看取できるが、大多数の須恵器は精巧なものである点、そして同窯跡の灰原や土器溜まりでは、多量の軟質系土器が出土しており、渡来的な要素が非常に強い段階といえる。

こうした状況は、生産規模の大小はあろうが、渡来型として認識した各地の窯でも同様なあり方が予測される。陶邑周辺部では、一須賀二号窯と吹田三二号窯が当該期にあたり、渡来人による直接的な操業が復元できるのであるが、現段階では大庭寺遺跡は量的に群を抜いているといえる。

こうした遺物の内容と共に、窯の形態においても初現期の渡来型は特色がある。これについては、かつて筆者が整理したことがある（植野一九九九・二〇〇三ａ）。残念ながら大庭寺遺跡では窯体が確認されていないが、第一図1・2で示した吹田三二号窯や居屋敷窯のように、極めて直線的な形態をもち小規模なものが殆どである。幅は二ｍ未満、全長も一〇ｍ未満であり、煙出し部も焼成部から段をもたせて接続するといった共通した特徴をもっている。筆者はこれを「直線型」として初現期の特色として分類した。窯跡調査の例が少ないが、一須賀二号窯や奥ヶ谷窯、三郎池西岸窯もこれに準じる。

一方、後続するＴＫ七三型式段階には、幅が二ｍ以上、全長も一〇ｍを越えるものが出現してくる。焼成部の平面形は膨らみ、床面傾斜も曲線を描いて延び、これに直接煙出しが接続するため、前段階のものとは大きく異なる（第一図3）。全体的に大型化、曲線化が認められるため、前段階の「直線型」とは異なる「曲線型」とした。こうした変化は、少なくとも同段階には窯の改良が進行し、一定の変化を成し遂げた結果と判断できるのである。

以降、窯の形態変化は、このＴＫ七三型式段階を基本にして移行するようになることから、後代窯の祖形になる。こうした「直線型」から「曲線型」の変



第１図　初現期の窯跡（スケールは約１/120、1．藤原1986、2．副島1996、3．中村・他1978より、一部改変）

化は、ＴＧ二三二型式段階の極めて渡来的色彩が強い段階から、さほど時間を経過せずＴＫ七三型式段階で変化し、窯構造が改良されたと考えられる。言うならば、渡来人の直接的要素が崩れて、次第に改良へ移行した姿が読みとれるのであり、大きな変化を見い出せるのである。

二、須恵器にみられる渡来的要素

次に、須恵器から見た渡来的要素の推移を見ていこう。初現期の渡来型の窯は、全ての面で渡来的要素が強いのは当たり前である。この段階の大庭寺遺跡は、器形の面でも多種多様な組成をもっているが、当然のことながら技法的にもかなり限られた特徴が窺えるのである。

製作技法の推移　壺・甕を製作する技法として叩き技法がある。初現期の叩き目文には、平行・格子・斜格子と縄席文があるが、さらにこの段階の手法として、叩きの後に施す外面スリ消し技法の存在が特色である。

第一表は初現期の技法と文様を整理したものである。大庭寺遺跡三九三―ＯＬの資料は多少新段階の遺物も含まれるが、甕に残る手法として、平行叩き目が一六・五％が、格子叩き目が一・七％、斜格子叩き目〇・五％、縄席文が五％のほか、叩きの後に外面をスリ消すものがなんと六五・七％も存在している。その他、ハケ目をもつものが一〇・五％、その他は〇・一％存在するという。廃棄された資料であるために、元来の状態を表しているとは言い難いが、外面スリ消し手法が六割近く存在する点は、他の手法と比べて群を抜いており、この時期の特徴として良かろう。また量的には少ないが、底部絞り技法が存在しているのも特徴である。

ＴＧ二三二型式段階に含めて考えているＯＮ二三一号窯は、ＴＧ二三一・二三二号窯の直後と判断できる資料である。この窯では、外面スリ消しの手法は

第１表　各須恵器窯の技法と割合〈（　）は比率〉

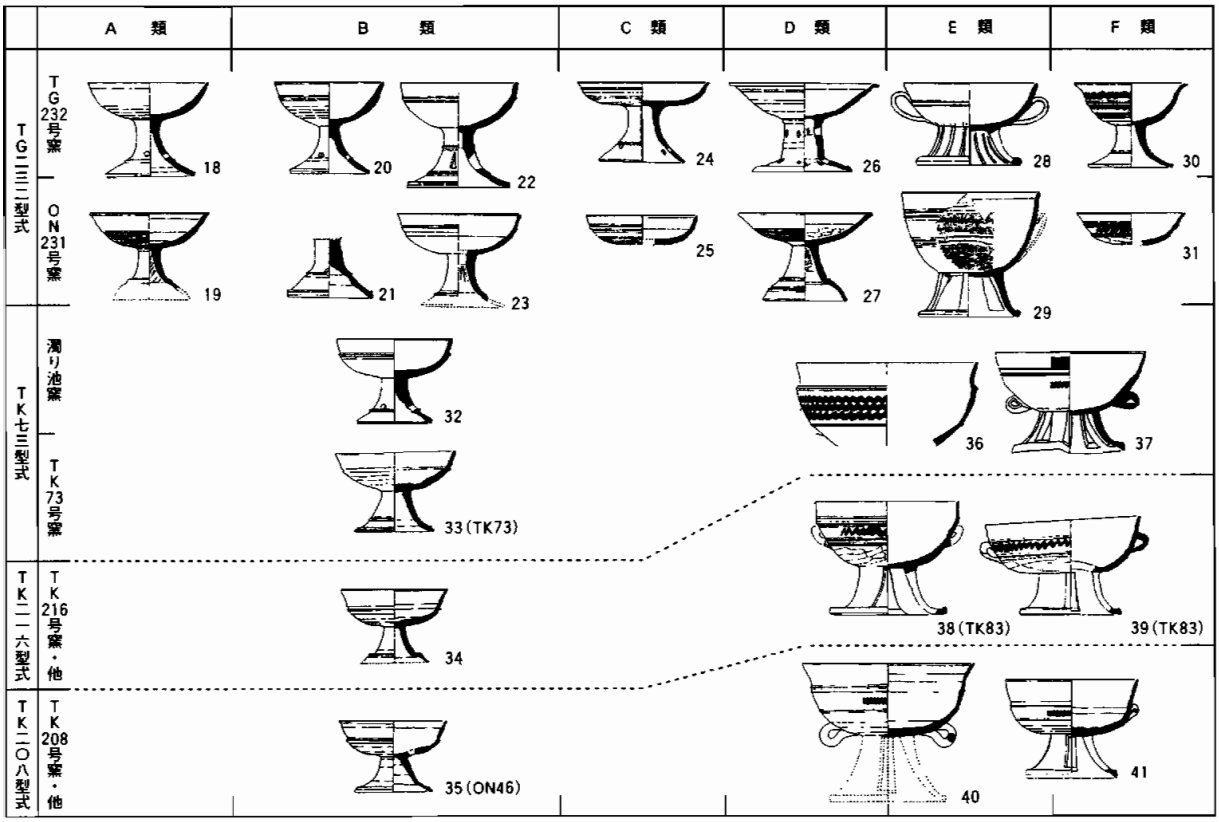
		大庭寺遺跡		ON231	濁り池窯	TK73	TK85	TK87
		TG231・232	393－OL					
叩き目	平行叩き	◎	(16.5)	(43.5)	○	7033 (97.6)	5110 (84.9)	2364 (93.8)
	細い平行叩き	◎	○			156 (2.2)	391 (6.5)	37 (1.47)
	斜格子叩き	◎	(0.5)	(56.5)	○	0	278 (4.6)	74 (2.9)
	格子叩き	◎	(1.7)			17 (0.2)	222 (3.7)	45 (1.8)
	縄席文	◎	(5.0)	0		0	20 (0.3)	1 (0.03)
	小計			(100)		7206 (100)	6021 (100)	2521 (100)
その他	ハケ目	◎	(10.5)	○	△			
	底部絞り	○	○		△			
	外面ナデ	◎	(65.7)	△	△			
	組紐文	◎	○	○				
	篦描文	◎	○	○				
	螺旋文	◎	○		△			

極端に減少しており、縄席文も皆無のようである。逆に、平行叩き目と格子叩き目が主流をなしている。こうした状況は、特に外面スリ消しの手法の減少に注目すれば、極めて省略指向として読みとれる。

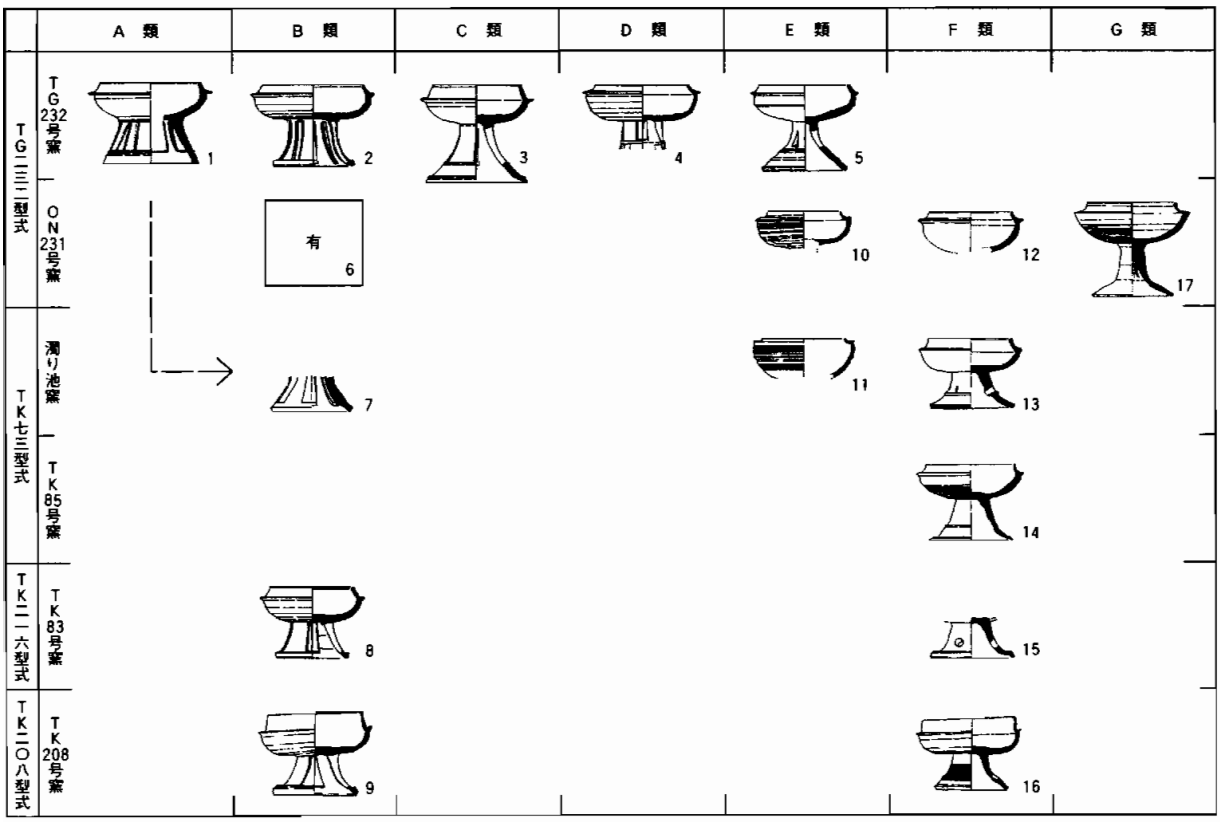
これがＴＫ七三型式段階になるとさらに変化している。外面スリ消しの手法はほとんど認められず、叩き目は、平行叩き目（細かい平行叩き目を含む）が九割を越え、格子叩き目（斜格子を含む）の割合は微量になる。しかし僅かながら縄席文が存在するが、この数は格子叩き目以下の数値である。縄席文については、ＯＮ二三一号窯ではたまたま確認されていないが、この段階までかろうじて存続した可能性がある。ＴＫ七三型式の古段階と考えている濁り池窯では、外面スリ消しの手法と底部絞り技法が僅かに認められおり、ＴＧ二三二型式からの過渡期的様相をもっている。

こうした変化は、初現期のＴＧ二三二型式段階で見られた篦描文や組紐文や螺旋文の減少、あるいはハケ目の消滅でも認められる。特に器台や高杯の蓋等に見られる文様は、ＯＮ二三一号窯ではかなり乱れていき、ＴＫ七三型式では一部を除いて消滅していく傾向があり、ＴＫ七三型式段階での杯の登場もその流れである。それは一機にではなく、濁り池窯で見られたように、僅かながら外面スリ消しの手法や底部絞り技法、そしてハケ目等を残しつつ、徐々に移行していったのであり、ＴＫ八五・八七号窯に縄席文が残る点も、こうした経緯で解釈できる。

しかし、ＴＫ七三型式の主要な要素は、第一表でその他とした項目や縄席文の消滅現象であり、前段階とは大きな違いが認められるのである。筆者は既に別稿でも示しているように（植野一九九五）、こうした違いを時間的な経緯による省略化と考えている。比較的複雑な格子目文や縄席文の不採用、全体を整形後に再び外面をナデ消す手法、底部絞り技法の不採用は、簡素化、単純化へ向けての省略化の現象であろう。そして文様の単純化もこれに加わっている。こ



第2図　無蓋高杯の消長（植野2002より）



第3図　有蓋高杯の消長（植野2002より）

うした点において、初現期の渡来的要素は徐々に、或いは急激に変化していったことが解るのである。

器形の取捨選択　次に同時期の器形の消長について見てみよう。第二・三図は高杯の消長を示したものである。第二図は無蓋高杯の変遷である。無蓋高杯は、TG二三二型式段階では図示した以外に、さらに一〇類が加わって計一七類存在しており、初現期には多種多様な形態が製作されていた。ところがTK七三型式段階になると、六類まで減少していることがわかり、以降さらに減少して、TK二〇八型式段階で存在するものは、B・E類に絞られていくことがわかる。

こうした傾向は有蓋高杯においても認められる（第三図）。無蓋高杯ほど複雑ではないが、有蓋高杯では七類あったものがTK七三型式段階になると二類に減少し、後代に続く形態がほぼこの段階で整っていることが分かる。

これは、器台や他の器形でも窺える現象である。TK七三型式段階には、依然として前代から引き継がれた異形の須恵器が含まれるのが一つの特徴であるが、逆にこの段階にはこうした選択が進行した段階といえるのである。いわば、TK七三型式段階には器形の選択が行われ、複雑なものは捨て去って機能的な実用的なものが残されていった、いわば取捨選択が行われた段階と推測できるのである（植野二〇〇二）。これは当然、前述した技法や文様の省略化とも連動しているのである。

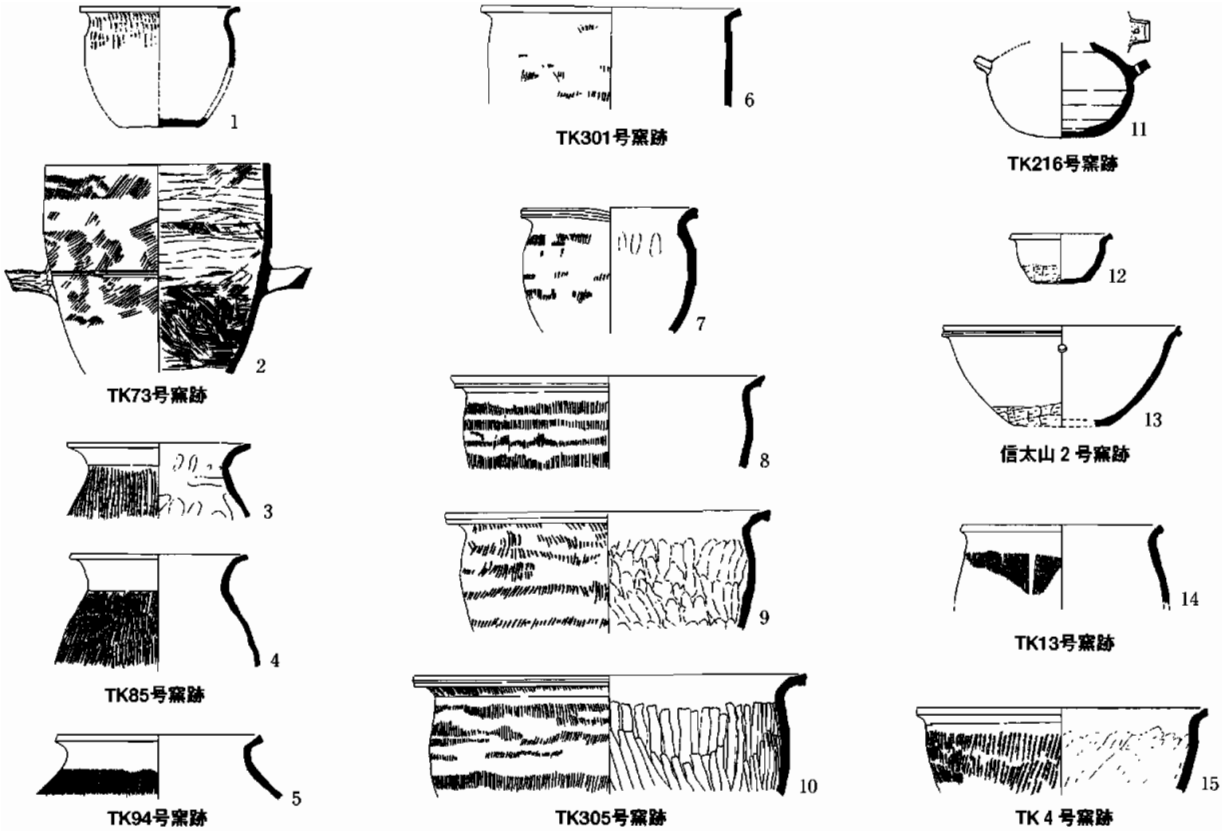
従って器形の消長を見ても、渡来的要素はTK七三型式段階を境にして大きく減少しているのが分かるのであり、純粋な渡来的様相から変形した様相へと変化していく過程が復元できる。

続く時代についてみてみよう。TK二一六型式以降では、渡来的な要素は激減し、いわゆる日本化・定型化の方向へと進む。これはいうまでもなく、形態や組成の面、さらには技法的な面においてもうかがえ、TK二〇八型式段階へと続くのである。TK七三型式段階まで多少存続していた渡来的要素は、この段階でほぼ消えるのである。

その他の渡来的要素　次に、他の遺物に見られる渡来的要素について見てみよう。前述した須恵器以外にも、部分的にその要素を残すものが存在する。その例として、TK二一六号窯で認められる両耳壺（第四図11）がある。この須恵器は、現段階において前代で確認されていないものであるために、新来の渡来人の存在や参画が推測される。また、伏尾遺跡出土の蓋（第八図7）は小阪遺跡でも出土しており、同様に前代で確認されていないものである。しかし、量的には多くない。これらの遺物の存在から、TK二一六あるいはTK二〇八型式段階で、新器形を作り出した多数の渡来人が新たに参入したとする説があるが、これについては筆者は否定的である。ごく限られた外的要素や渡来人の参画によって新たな形態が加わったのであり、須恵器の全体的な変化を大きく左右した痕跡は、今のところ見あたらない。

さらに、窯跡から還元焔焼成された軟質系土器の形態を有する土器が出土する例（第四図）がある。比較的TK七三型式段階以前に多く認められるが（1～4）、その量は少ない。5～10はTK二一六型式段階、12～14はON四六段階であり、TK四号窯出土の15はTK二〇八型式段階もしくはTK二三型式の古相の特徴をもつ。これらの遺物は、須恵器の主流形態ではなく、軟質系土器作りに堪能な渡来人、あるいはその影響を強く受けた人物の製品であることは充分推測でき、僅かであるが窯跡での渡来人や渡来的要素の存在を指摘できる。TK二一六～二〇八型式段階では少量となり、TK二三型式でかろうじて存在を確認できる状況である。

以上のように、須恵器から見た渡来的要素の動向を見てきた。その傾向は、初現期のTG二三二型式段階の純粋なものから、TK七三型式段階の選択された段階、そしてTK二一六型式段階以降の日本化・定型化の段階が存在し、T



第４図　窯跡出土の渡来系土器（Ｓ＝１：８）

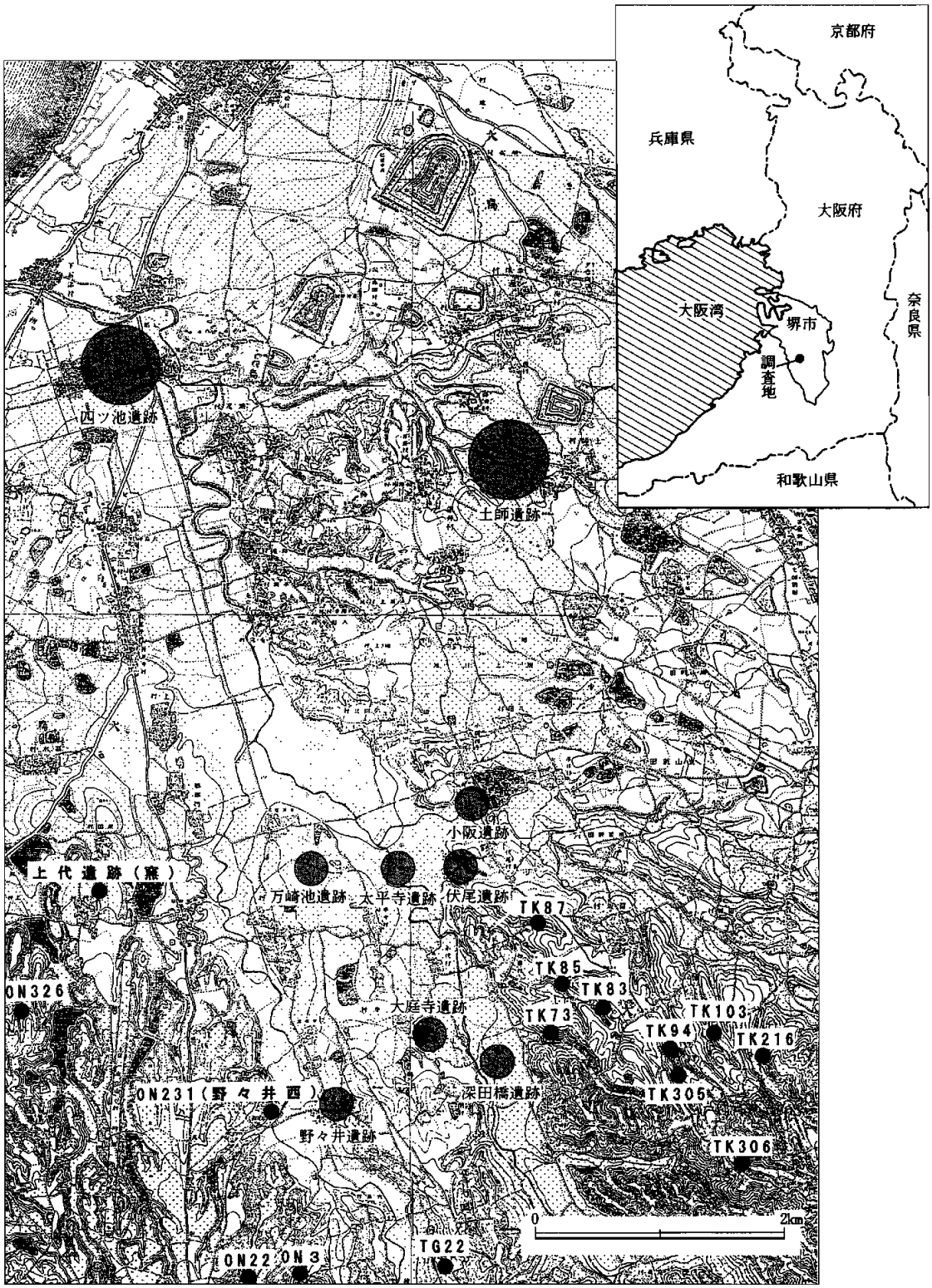
Ｋ七三型式段階以降では渡来的要素は極端に減少していくことが分かった。しかし、還元焔焼成された軟質系土器の存在からＴＫ二三型式頃までは、かろうじて渡来的要素が確認できた。

本稿の目的である渡来人の動向と合わせて見た場合、こうした減少は次項で述べるように、完全な渡来人の消滅ではなく、少なくとも５世紀代の須恵器生産には継続して渡来人が関わっていたものの、須恵器ではその痕跡が薄れていくということである。渡来人と倭人の協業の割合や組織の改編、あるいは政策的な要因がその背景にあることが推測される。

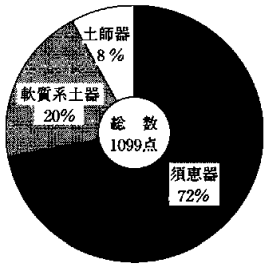
三、集落遺跡にみられる渡来的要素

続いて、集落遺跡の内容を整理して、渡来的要素の存在と渡来人の関わり方を検討していこう。窯や生産工房がセットで捉えられる遺跡は少ないが、近年、陶邑窯内においては、大庭寺遺跡や小阪遺跡、伏尾遺跡、そして深田遺跡、野々井（南）遺跡、万崎池遺跡等が調査され（第五図）、その多くが須恵器生産との関係を示唆する内容をもっており、その実態が徐々に明らかになってきている。陶邑の集落とその変遷、生産体制の変革と性格付け等は、既に岡戸哲紀が詳細に整理・検討しており（岡戸一九九一・一九九四、岡戸・他一九九七）、おおよその動向は掴めるようになっている。ここでは岡戸の成果を参照にしつつ、時期別に概要を紹介し、次いでその特徴を整理して、渡来的要素と渡来人の動向について検討してみよう。

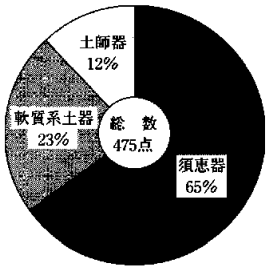
ＴＧ二三二型式段階　この段階は渡来型としたように、極めて渡来的要素が濃い段階である。集落遺跡の中でその色彩が強いのは、やはり大庭寺遺跡である（第六図）。大庭寺遺跡では、窯体自身は検出されなかったが、灰原の存在から二基の窯跡が推定され、隣接して竪穴住居址や平地式住居、溝・土坑・土



第５図　陶邑の主な遺跡と窯跡（岡戸・他1996より、一部改変）

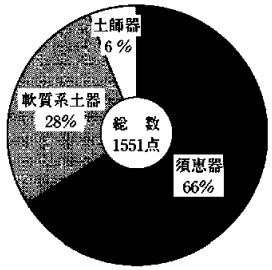


破片総数



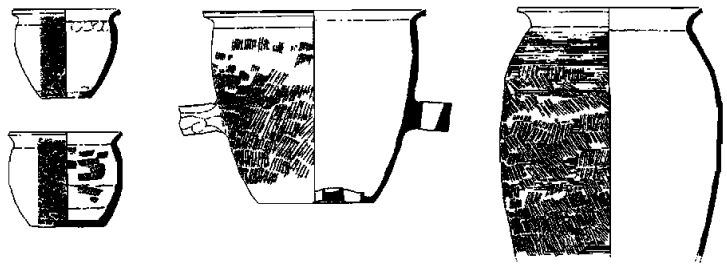
個体別

1．393-OLの遺物比率

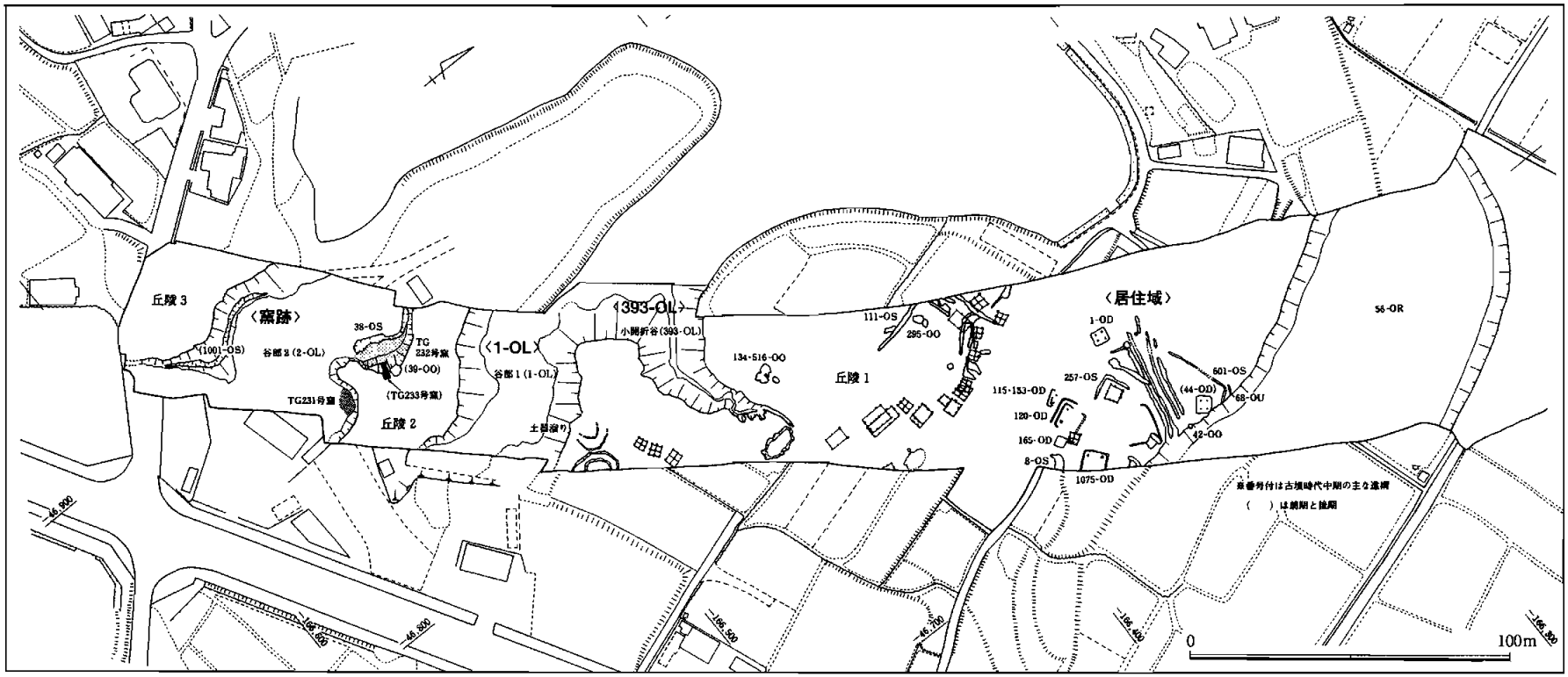


破片総数

2．1-OLの遺物比率



3．1-OL出土の軟質系土器



第6図　大庭寺遺跡の遺構と遺物（冨加見・他1993、岡戸・他1996より、一部改変）

器溜り・河川等の遺構が検出されている。各遺構からは多量の須恵器や軟質系土器、土師器が出土しており、TG二三二型式からTK二〇八型式にかけて長期間存続している。土器溜りからは多量の須恵器が出土しており、その近辺が須恵器の選別場としての可能性をもつという。TG二三二型式段階の遺構は、灰原と土器溜り（三九三―OL）、そして調査区の東側に存在する六棟の住居跡を含む居住域である。

大庭寺遺跡の東部にある住居址・溝を含む居住域周辺の遺構では、ほとんど土師器の出土が無く、出土遺物は須恵器と軟質系土器で占められる傾向がある。こうした点から、極めて渡来的要素が強いと考えられる。渡来人が直接居住した状況が復元できるのが特徴である。

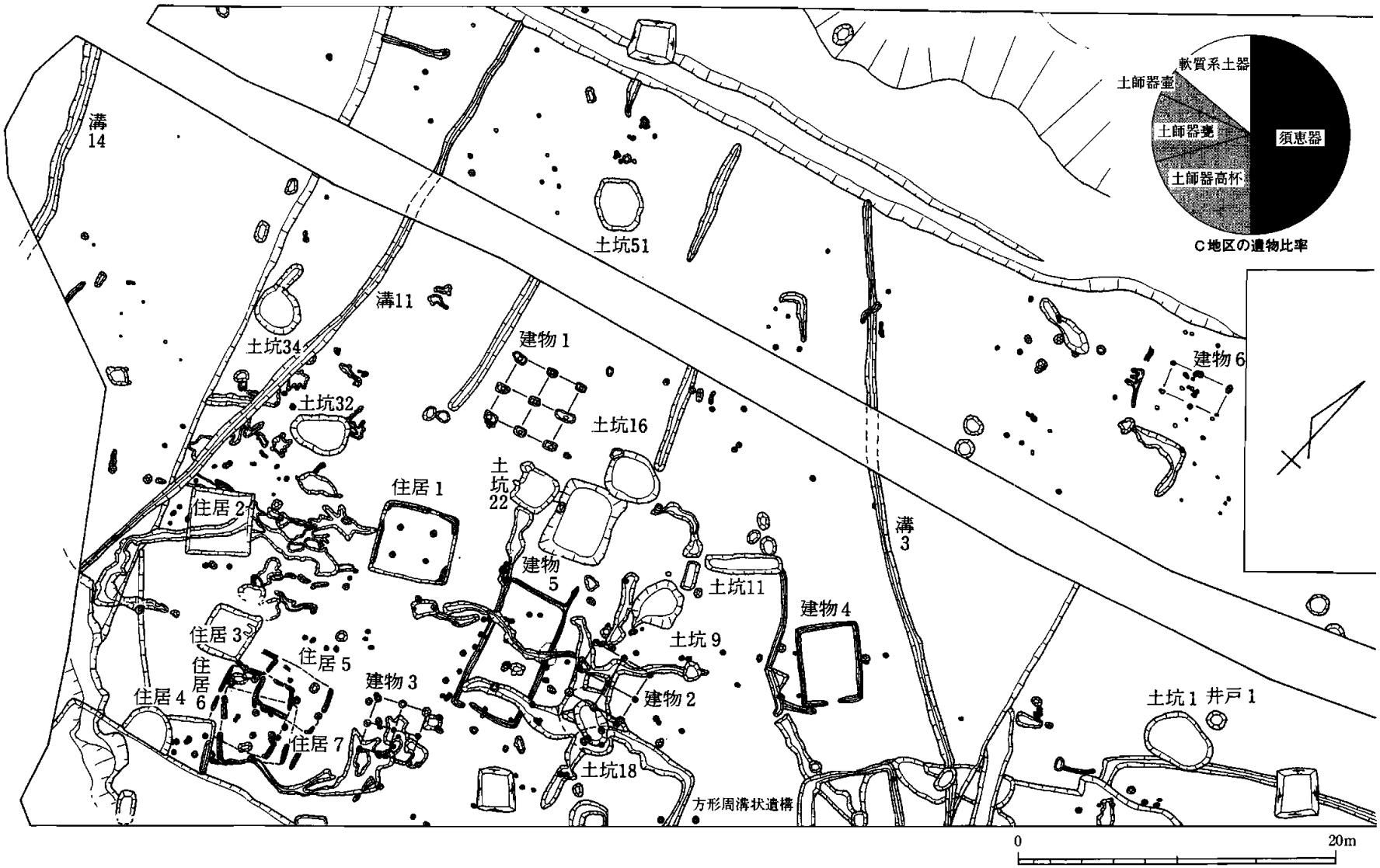
続いて、土器溜り出土の土器比率を見てみよう。三九三―OLは、数次にわたって調査されているために調査次ごとの数値が異なるが、第Ⅰ期調査分では須恵器が全体の八七％存在し、次いで軟質系土器が九・二％、そして土師器（不明品含む）が三・八％の比率であるという。第Ⅱ期調査分では（第六図1）、破片総数では須恵器が七二％、軟質系土器が二〇％、土師器が八％となり、個体別の比率では、須恵器が六五％、軟質系土器が二三％、土師器が一二％となり、大幅な違いは認められない。土器溜まりの性格上、平均的な比率とはいえないが、窯跡に付随することから須恵器の割合が非常に高いのは当然である。そして、土師器に比べて軟質系土器の比率が高く、いずれも二倍近く存在する点が特徴であろう。

こうしたことからも、大庭寺遺跡は渡来的要素が非常に強く、多数の渡来人の存在が窺えるのである。渡来人が直接居住して、須恵器生産に従事した様相がわかる。ただし、土師器の存在は全てが渡来人とすることは出来ず、生産に当たっては在地人との協業が推測できるが、その割合はかなり低いと考えざるをえない。

TG二三二型式段階の集落は、周辺地域ではほとんど確認できない。大庭寺遺跡の北方約一・五kmの地点に万崎池遺跡が存在するのみである。万崎池遺跡では、重複もあるが一三棟の竪穴住居址が検出されており、そのうち数棟の住居址やその周辺部から数点の須恵器が出土した（石神一九八四）。出土須恵器は、TG二三二型式とほぼ同時期のものと、一部TK七三型式を含む可能性がある。驚くことに万崎池遺跡では、出土遺物の大半が土師器であり、軟質系土器は全く存在していないのである。至近距離でありながら、大庭寺遺跡とは全く異なった様相を示しており、渡来的な要素はほとんど指摘できないのが特徴である。大庭寺遺跡は、須恵器生産の専門的な分野を担った特別な集落といえるが、万崎池遺跡は逆に生産に従事しない一般集落として位置づけられ、渡来人（工人）で構成された集落との違いが顕著に表れている例であり、渡来人の導入の経緯と格差が認められる。

TK七三型式段階　この段階には、大庭寺遺跡が継続して営まれている。土器溜まりである一―OLでは、引き続き大量の軟質系土器が出土している。一―OLは、TK七三型式と一部はTK二一六型式の須恵器を含んでいるが、破片総数の遺物比率は、須恵器が六六％と高く、次いで軟質系土器が二八％であるのに対して土師器は六％となっており、ここでも依然として軟質系土器の割合が高い。ただし軟質系土器には、胴張り化したものや端部が鈍くなっていく傾向もあり、多少の変化が現れてきているようであるが（岡戸・他一九九五）、大庭寺遺跡は前代の体制を引き継いでいると推測できる。

一方この時期には、周辺に新たな集落が形成され始め、大庭寺遺跡とは多少異なる傾向が認められるようになるのが特色である。小阪遺跡は、当段階からTK二一六型式段階にまたがっているが、主要な遺構は当該期に属している。C地区と呼ばれる箇所で遺構が集中して検出された（赤木・他一九九二）。大きく二条の溝によって区画された中に、竪穴式住居址六、平地式住居址二、掘



第7図　小阪遺跡の遺構と遺物比率（村上・他1987、赤木・他1992より、一部改変）

立柱建物三、方形周溝状遺構、その他が検出されており（第七図）、隣接する河川部を含めて多量の土器が出土しており、土師器の形態を模した須恵器等も出土している。C地区では、須恵器と土師器・軟質系土器の割合はほぼ一：一であり、そのうち軟質系土器は全体の約一〇％強であり、土師器は全体の四〇％弱であるという（第七図）。大庭寺遺跡に比べて、土師器の割合が軟質系土器に比べて三倍以上になるのが特徴である。

そして小阪遺跡では、軟質系土器の長胴甕の出土量がきわめて少なく、逆に土師器の甕が多い傾向があり、長胴甕に変わって土師器の甕が使われた可能性と、渡来人の在地化傾向が指摘されており（三宮一九八九）、渡来的要素は大庭寺遺跡に比べると低くなる。渡来型から在地化への移行、あるいは渡来人と在地人の比率の逆転が推測されるが、一定の軟質系土器の出土は、依然として渡来人との協業が予測される。

ＴＫ二一六～二〇八型式段階　この段階には、さらに多くの集落が確認できるようになる。初現期から継続する大庭寺遺跡と前段階から出現した小阪遺跡は、この段階にも継続して営まれ、新たに小阪遺跡に隣接して伏尾遺跡が出現し、やや遅れて深田遺跡や野々井遺跡も登場してくる。

小阪遺跡はこの段階以降はやや不明であるが、河川から大量の遺物が出土しており、継続して営まれている。特に調査区の北側では同期の灰原が検出されており、須恵器生産に関わる集落として存続している。

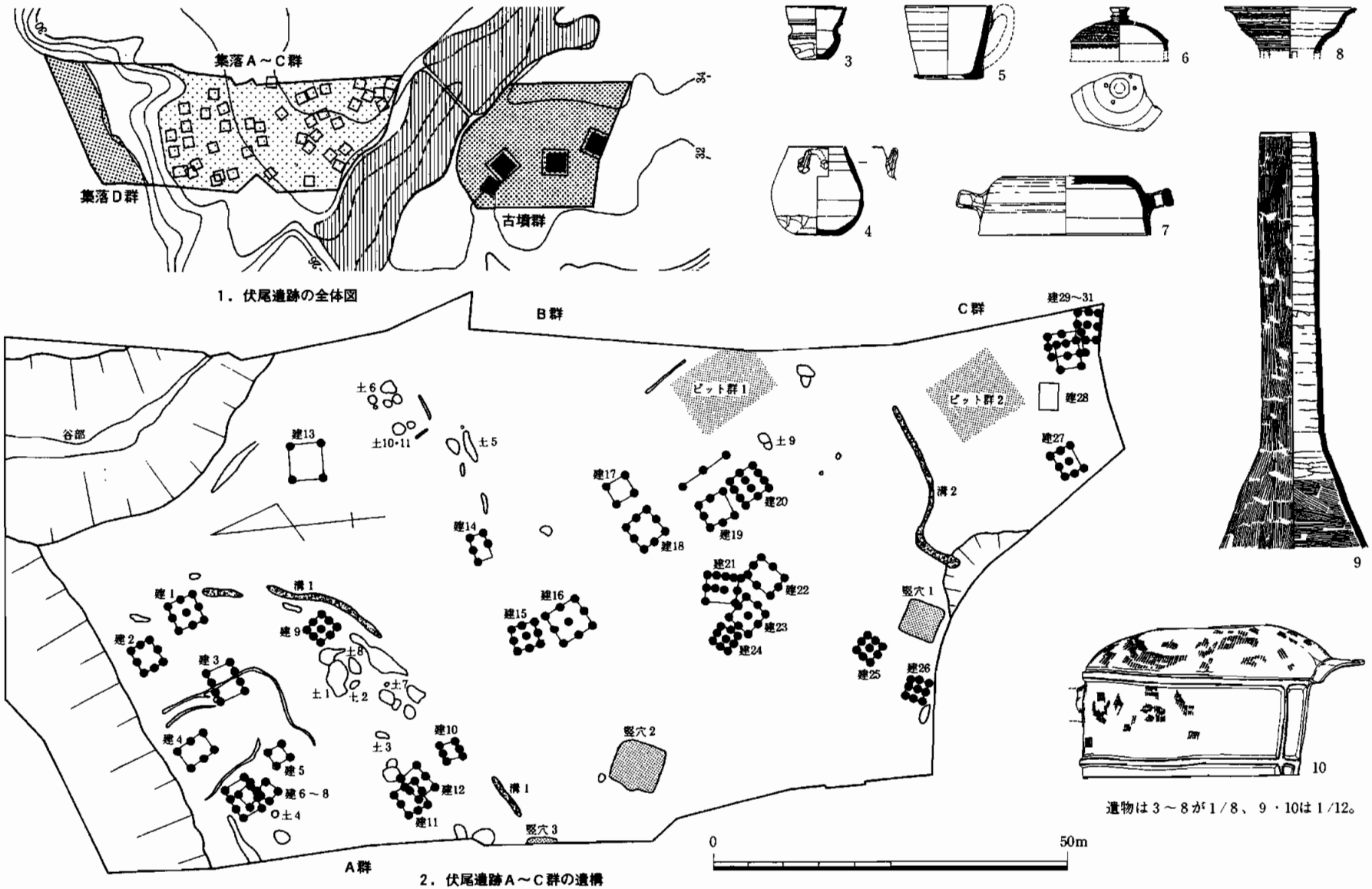
伏尾遺跡は、大きく二条の溝で区画された中に、三棟の竪穴住居址、三〇棟の掘立柱建物、土坑、その他が検出されており、全体では四群（A～D群）で構成される（第八図、岡戸・他一九九〇、一九九七、森村・他一九九二）。掘立柱建物は重複するものもあるが、A～C群の区画の中に存在している。二間×二間のものが多く、その他一間×一間、一間×二間、その他があり、平面形も正方形・長方形の二者があり、総柱も含まれている。配置もさほど規則的ではなく、やや乱雑な構成を呈しているが、隣接する溝や土坑から多量の須恵器が出土することから見て、小阪遺跡と同様に須恵器生産と深く関係した遺跡であることは間違いなかろう。特に、住居址の数に比べての異常なほどに掘立柱建物が多いのが特徴である。

A～D群の単位は、須恵器生産から選別に至る連続した作業過程の組織的な単位の可能性も示唆し、大規模な集落の出現と構成は、生産の安定化や組織化が背景にあったことも指摘されている（岡戸・他一九九七）。

伏尾遺跡でも、一定量の軟質系土器が土坑・溝から須恵器と共に出土している。出土土器の比率は出されてないが、軟質系の甕・台付鉢・その他があり、小阪遺跡と前後する割合で存在した可能性がある。出土遺物には、移動式竈や筒状土製品等の異形品（第八図9・10）も出土している。また須恵器においても、第八図3のような前代の形態を備えたものや、4～7のような例外的な器形をもっており、同時に生産した製品であるならば、ＴＫ二一六号窯出土の両耳壺（第四図11）と同様の性格が考えられ、渡来人の存在を示している。しかし、こうした渡来的要素は継続して存在するが、割合的には減少傾向にあると推測できる。

堺市教育委員会で調査した伏尾遺跡の東地区では、溝で囲まれた中に一棟の住居址と溝・土坑が多数検出されているが、多量の須恵器が出土している割には、軟質系土器の出土は少ない傾向のようであり（續一九九三）、渡来的要素の減少傾向を裏付けている。

深田遺跡や野々井遺跡は、伏尾遺跡ほど詳細な集落構造は不明であるが、ＴＫ二〇八型式段階に主流があるようである。深田遺跡では、掘立柱建物が柵列に囲まれるように三棟検出されており（中村・他一九七三）、規模の違いはあるであろうが、伏尾遺跡と共通する構造が考えられなくもない。野々井遺跡も集落の構成は全く不明であるが（中村一九八七）、多量の須恵器が出土してい



第8図　伏尾遺跡の遺構と遺物（岡戸・他1990、1997より、一部改変）

ることから、よく似た状況が復元できると考えている。

両遺跡では、多量の須恵器は出土しているが、軟質系土器の出土は微量であるのが最大の特徴である。小阪・伏尾遺跡とは約二kmの距離をもつが、こうした位置関係が減少の原因であるとは即断できない。確実に言えることは、当時期は渡来的要素が激減する時期に当たると言うことである。前段階で見られた大集落の出現と併行して、渡来的要素の希薄化がかなり進行した段階と考えられよう。

また、この時期からの特色として言えることは岡戸が指摘するように、集落に隣接して古墳群が営まれることである（岡戸一九九四）。伏尾遺跡、小阪遺跡、野々井遺跡で確認でき、野々井遺跡では六世紀代に亘って営まれる。その中には埴輪をもつ三〇m級の古墳も含まれ、須恵器製作集団の墓域保有が一般化していく時期と言うことも出来る。

渡来的要素の推移　前述してきたように、集落遺跡での渡来的要素は大庭寺遺跡を除くと、徐々に減少傾向にあるといえ、TK二〇八型式前後には激減する傾向が読みとれる。第二表はその概要を一覧にしたものである。遺構においては、掘立柱建物の増加が伏尾遺跡で認められるのが最大の特徴であり、一つの画期とすることができよう。

平地式住居とされるものは、大庭寺遺跡と小阪遺跡で確認されている（第九図）。工房や生産関連施設の可能性もあり、こうした遺構が継続して存在する点は、渡来的要素が継承されたと考えられよう。小阪遺跡の遺構（第九図3）は、長辺が大庭寺遺跡（第九図1）のものと近似している。第九図5・6は小阪遺跡で方形周溝状遺構として古墳の可能性をもつ遺構として報告されたものであり、1～4に比べると溝の幅がやや広いために同種の施設とは断定できないが、5は1の短辺と近似した長さであり、6もその範疇である。そして遺構配置においても、3と5、4と6は軸を平行にして近距離に位置していることから（第七図）、関連した施設の可能性も捨てきれない。

造り付け竈をもつ住居址は、大庭寺遺跡では確認されていないが、小阪遺跡と伏尾遺跡で確認されており、渡来系要素として前段階に存在したものが継承された可能性も残されている。

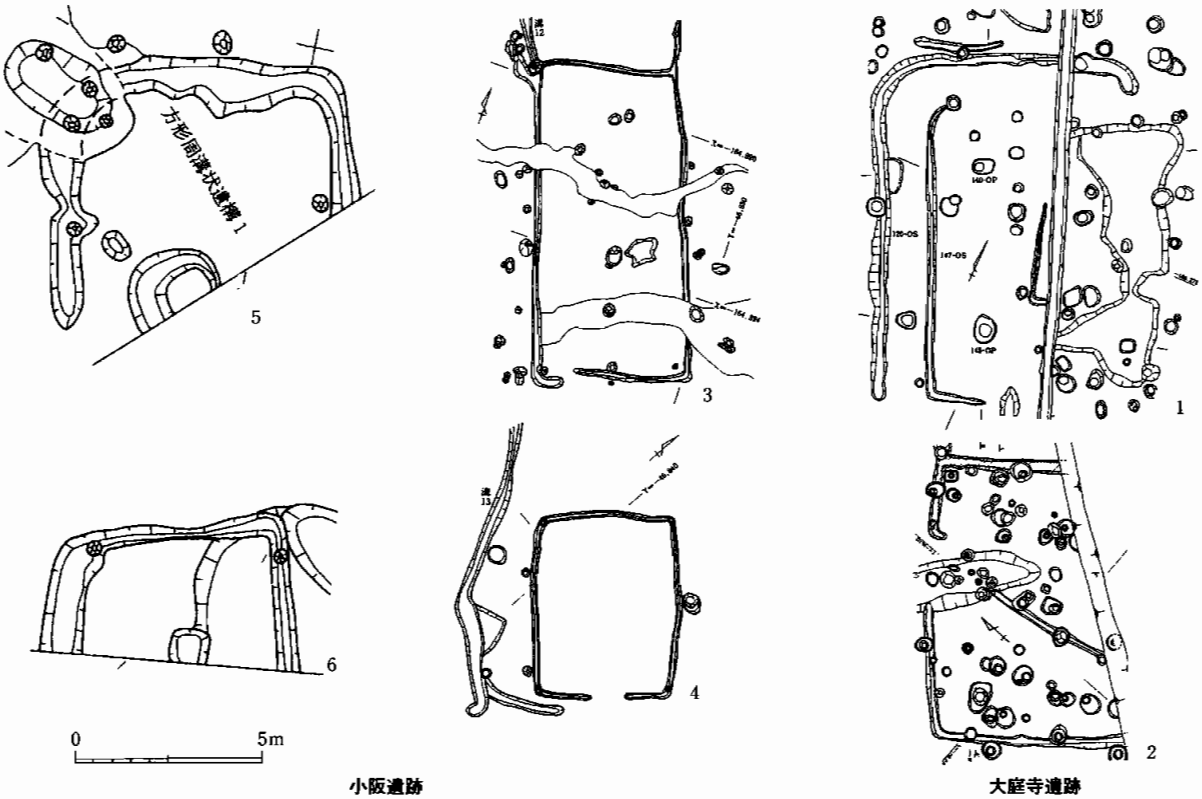
遺物の面では、やはり軟質系土器の存在がポイントであろう。万崎池遺跡のあり方は、生産に関わる遺跡の違いや渡来人の参画の有無を如実に示すものであるが、万崎池遺跡に隣接する西浦橋遺跡でもTK七三型式前後の須恵器片が少量出土しているが、軟質系土器は報告されていないし、TK二一六型式以前の須恵器を少量出土する太平寺遺跡でも同様の傾向が看取でき（石神・他一九八三）、渡来人の有無を区別することができる。逆に大庭寺遺跡では多量の出土を認め、量的にも土師器を凌駕していた。それが、伏尾遺跡を境にして激減する傾向があり、逆に土師器が主体になっていく。

以上のように、陶邑窯の集落遺跡における渡来的要素は、生産に関係する集落と一般集落とでは大きな差を認めることが出来た。そして渡来的要素は、ほぼTK二〇八型式を境にして激減することが明らかになった。五世紀後半～六世紀代の集落は今回は取り扱っていないが、野々井遺跡や田殿遺跡が広範囲に形成されていき、先ほどの万崎池遺跡や西浦橋遺跡、太平寺遺跡でも多量の須恵器が出土しており、生産に関係した集落として再形成されたと考えられる。しかし、六世紀代の各集落では、もはや渡来的要素で遺跡を区別することは出来ないのが特色である。

また、本論とは直接関係しないし、時期的な位置づけも不確定であるが、鞴羽口を出土する遺跡がTK二〇八型式以降に多数認められる。第二表に加えて、西浦橋遺跡でも確認されており、須恵器生産に関わる集落において小規模な小鍛冶が行われていたと推測できるのであり、将来的に集落内の組織体制や分業のあり方が分かっていくであろう。

第2表　集落遺跡の一覧表

	時期					施設					遺物			古墳	備考
	TG 232	TK 73	TK 216	TK 208	TK 23	住居址	造付竈	掘立柱	平地住	区画溝	須恵器	軟質系	土師器		
大庭寺遺跡	――	――			-------	6		△	△	○	◎	◎	○		当具
万崎池遺跡	――	---				13		3			○		◎		須恵器5％
小阪遺跡		---	――	――	----	8	○	3	△	○	◎	○	◎	○	当具
伏尾遺跡			――	――		3	○	30		○	◎	○	◎	◎	当具
深田遺跡			------	――	----			3		○	◎	微	◎		柵列・輔羽口
野々井遺跡			-------	――	――			△		△	◎	微	◎	◎	輔羽口
太平寺遺跡				-----	――	○		△		△	◎		◎		輔羽口



第9図　大庭寺遺跡と小阪遺跡の平地式住居（冨加見・他1990、1993、赤木・他1992より、一部改変）

四、須恵器生産の展開と渡来人

陶邑における渡来的要素の有無や密度と渡来人の関わりについて、窯跡と須恵器、そして集落の面から概観してきた。窯跡や須恵器においては、既にＴＫ七三型式段階で大きな変化が起きていた。集落では、遺跡によって多少様相が異なるが、大庭寺遺跡を除く遺跡では、ＴＫ七三型式段階から減少傾向にあり、ＴＫ二〇八型式にかけて大きな変革期を指摘できた。一言で言えば、初現期の極めて渡来色の濃厚な段階から、漸次あるいは急激にその色彩が失われていくのである。

須恵器生産の拡大と渡来人　初期段階に現れる大庭寺遺跡はＴＫ二〇八型式頃まで存続するが、中でもＴＫ七三型式段階までは渡来的要素が濃厚に認められ、その後は資料的に不明な面がある。初現期から渡来人の主導によって須恵器生産が行われ、軟質系土器の比率から見れば、二～三倍以上の渡来人が予測でき、それに付随して在地人が生産に関与していたことが推測されよう。大庭寺遺跡においては、こうした状態が少なくともＴＫ七三型式段階まで存続している。

ところが同じＴＫ七三型式段階でも、小阪遺跡の場合は渡来的要素の比率がやや低くなる。軟質系土器の割合は逆転し、在地人を主体とした渡来人との協業体制が復元できる。この時期は、こうした生産体制が形成され始めた時期として位置づけることが出来る。比較的至近距離にありながら、両者の違いは何を示すのであろうか。一つの要因は、生産の拡大と渡来人の移動を含む組織化の動きであると考えられる。

初現期であるＴＧ二三二型式段階の窯は、陶邑では現在のところ大庭寺遺跡のみであり、今後発見される可能性があるとしても多くは期待できない。ところが、ＴＫ七三型式段階の窯は微妙な時間差はあるが、ＴＫ七三号窯・ＴＫ八五号窯・ＴＫ八七号窯・上代窯・濁り池窯（ＯＮ二三六）・他のように、一〇基前後確認できる。いずれも大庭寺遺跡を基点にして周辺に築かれているといえる。築窯と同時に、窯の近隣には生産工房や集落も形成されていた可能性も考えられよう。生産の主役を担う渡来人も、こうした新しい窯の築造や生産に参画し、あるいはそれに従って移動したことが予測できよう。そして、渡来系工人の不足は在地人によって補充された結果、小阪遺跡が示すような軟質系土器の割合になり、在地人の比率が高い協業体制になり、新たな生産活動が行われたと考えられるのである。

逆に大庭寺遺跡では、濃厚な渡来的要素がしばらく引き続いている。これは、恐らく大庭寺遺跡が中核（母村）的な集落として、また出土須恵器のあり方からも生産の中心的存在として継続したことにより、依然として渡来人の割合は高かったのではなかろうか。必ずしも全てが、母村から集落が分村するような形態で新たな窯や集落を造ったとは言い難いが、生産地の拡大現象はこのようにイメージすることも可能である。

その後、渡来的要素は次第に減少していく。その過程を示すのが伏尾遺跡であり、さらに展開したのものが深田遺跡や野々井遺跡の状況であろう。各地に拡散したであろう渡来人は、しばらくの間は渡来的要素をそのまま残して活動したが、次第に生活様式や生活用具は取捨され、在地化の方向に移っていったのであろう。大庭寺遺跡もこの段階には、同じような状況になっていた可能性がある。したがって、大庭寺遺跡を含めた多くの集落がＴＫ二〇八型式段階やその直後に渡来的要素は激減し、概ね在地化していくと判断できる。しかしこれは、渡来人やその末裔の不在と言うことではなく、あくまでも遺跡・遺物から窺える現象なのであり、その要因はやはり生産の拡大が最も考えられる事項の一つであるし、一方では世代交代による必然的に避けることのできない在地

化の要因があったと推測できる。

生産体制と渡来人　須恵器の器形や技法の取捨選択は、ＴＫ七三型式段階には顕著に表れ、一定の定式化・日本化が進んだことは前に指摘した。大庭寺遺跡周辺で生産を開始した各窯では、依然として特異なものが含まれているため、継続して渡来人がその生産に従事し、主導的立場で生産に従事したことは確実である。しかし、陶質土器の系統性は徐々に失われ、この段階を境にして器種組成が大きく変わっていく現象は、右で述べた生産の拡大が大きな要因であり、必然的に省略化や合理化が行われたと考えられる。

一般的に考えて、渡来人自らが陶質土器の系譜を逸脱して、作り慣れた伝統的意匠を排除してまでも合理化を進めるものであろうか。決して、渡来人のみの発案ではないと判断する。なぜならば、軟質系土器は多少の変化を見せつつも確実に伏尾遺跡の段階までは継承されているのであって、陶質土器のみが大幅に改変されることとは矛盾する。本来ならば、陶質土器も従来の伝統を引き継ぎながら変化していくのが一般的な方向性なのである。

従ってこれは、須恵器という新文化受容と関係している。焼物という容器としての機能もさることながら、祭祀や葬送儀礼の新来文化の受容と生産が背景にあると考えられる。生産の拡大はこれを表していると考えられ、一様の取捨選択や簡素化を実行したのである。この時期の変化には、こうした二側面からの考察が必要である。そして、それにはヤマト政権や関係豪族、しいては須恵器生産掌握者による政策的な意向が存在したとしか考えられない。

北部九州や東海地方を除く地域では、初現期に造られた窯は一旦断絶し、続くＴＫ七三型式段階の窯はほとんど造られていない。逆に陶邑窯では拡大傾向が認められ、他の地域と状況が大きく異なる。これは、祭祀や葬送儀礼的な側面をもつ新来文化の需要と生産量に関係し、いち早くそれを遂行した陶邑窯、しいていはヤマト政権や関係豪族の指向が存在し、これも広い意味での政策と関係していると考えられる（植野一九九八ｂ）。

続くＴＫ二一六型式～二〇八型式への須恵器の変化は、ＴＫ七三型式段階に比べると、比較的格差が小さい。ＴＫ七三型式段階に日本化した須恵器が、さらに厳選されて、器形の統一がなされて定型化に向かう時期である。ＴＫ七三型式段階のような生産の拡大が漸次平行して継続した時期である。

定型化直前のＯＮ四六段階には、地方窯の第一の拡散が行われる。これは、陶邑窯での生産の拡大と、生産体制の整備が前提にある。小阪遺跡から伏尾遺跡にかけての集落規模の拡大や、伏尾遺跡で見られた生産から製品の管理に至る機構の存在、そして掘立柱建物群の増設といった変化と軌を一にしている。その後、窯跡や各集落遺跡において渡来的要素が激減する傾向もこの時期であり、全てが偶然の出来事とするにはあまりにも打算的である。生産体制の整備や組織化、ヤマト政権の政策的背景が存在し、陶邑窯の整備があってはじめて拡散も行えるのである。

五、手工業生産の受容と渡来人

以上のように、須恵器生産の開始と展開に関連させて渡来人の動向を述べてきた。須恵器生産は、渡来人がもたらした技術によって直接的に開花し、以後展開していくという方向性は、先学の諸説の通りである。ここではそれに加えて、渡来的要素の推移と渡来人の関わり方を具体的に検討した。

須恵器生産に見られる渡来人の動向は、岡戸哲紀が示すようにⅠ～Ⅳ期の流れで説明できる。Ⅰ期はＴＧ二三二型式段階、Ⅱ期はＴＫ七三型式段階、Ⅲ期はＴＫ二一六型式段階、Ⅳ期はＴＫ二〇八型式段階である。

岡戸は「工人集団を中心とした生産集団の組織は、Ⅰ期は渡来系中心集団、Ⅱ期はこの集団に渡来系集団と倭系集団の混在したもの、Ⅲ・Ⅳ期には新たに

倭系集団を中心にした集団が出現し」たとし、「Ⅲ・Ⅳにおける計画性、大規模化、古墳の存在など、前段階に比べて卓越していることが注目される」とする（岡戸一九九四）。そして、「Ⅰ・Ⅱは単純な工人集団集落」であり、Ⅲ・Ⅳ期は「生産から流通に至る一貫した須恵器生産を包括した集団の集落」としている。筆者もほぼこの考え方に準じている。細部では、Ⅱ期は生産の拡大に伴って器形の選択が行われ、組織化が始った段階で捉え、これには祭祀や葬送儀礼の新来文化の需要が背景にある。そして、渡来的要素の激減はⅣ期で捉え、その直前が地方窯の拡散を実行する段階であり、集落拡大の時期と符合していると考えている。

新来の技術を持ち込んだ渡来人の受容は、受け入れ体制の準備や生産地の選択等の後は、比較的瞬時に行われたと考えられる。大庭寺遺跡で集中して軟質系土器が出土したことから、即時に定住し、継続して生産に従事しているのである。しかも、万崎池遺跡や西浦橋遺跡の状況から分かるように、分散することはなく一箇所に集中する形態が復元できる。そしてそれは、大庭寺遺跡ではほぼ二型式の間、純粋な形で存続しているのが特徴であり、その後も生産に従事していることは前述の通りである。

こうした集中形態は、大規模な手工業生産や生業活動の場合、一般的な形態だったと考えられる。鉄生産遺跡である大県遺跡や、馬の飼育が考えられている長原遺跡一帯は多量の韓式系土器が継続して出土している。また大阪平野での土地開発や土木事業でも渡来人が多くの役割を果たしたことが指摘されており（田中一九八九）、いずれも、同じような状況が復元できる。

こうした大規模な集中形態は、北部九州や吉備地方を除いてほとんど存在しない。兵庫県においても軟質系土器を出土する遺跡は多数あるが、量的には極めて少なく、集中的な痕跡はないという（富山二〇〇三）。各地の豪族が独自に渡来人を招聘したり、偶然に単独渡来した場合も予測できるが、その規模と継続性の違いは明らかである。各地での小規模な生産や周辺への影響は認められるが、これは至って単発的なものが多い。

大阪平野においても、単発的な渡来痕跡は多数存在するが、集中的なものは限定されている。従って、大阪平野における手工業生産や生業活動における渡来人の受容は、至って政策的と判断できよう。ヤマト政権の直接的あるいは間接的な経営が推測できるのである。それは、前述したように、単なる生産技術の受容や発展に留まらず、その生産品の用途と関係している。須恵器や鉄器の場合は、容器や用具としての機能的側面と共に、大量に古墳に副葬されるという二次的な機能を備えている。須恵器は祭祀や葬送儀礼の役割を担う新来文化としても受容されており、生産拡大の方向性を生んだ。こうした需要と生産の関係が自ずから存在する。

従って須恵器生産では、既にⅡ期からその拡大が行われてⅢ期の状態をうみ、そしてⅣ期の完全な組織化の経過を経たのも政策の一環と理解できる。集中体制が基盤になり、こうした方向性が生み出された。古墳時代の手工業生産は、特に五世紀代においては極めて政治的色彩を備えていたと判断される。他の分野においてもこうした動向が追えるものと考える。

おわりに

以上のように、須恵器生産を中心として渡来人の受容と動向を見てきた。初現期おける渡来人の受容はさほど時間をかけずに、そして大規模な手工業生産や生業活動の場合は政策的に集中して行われた。窯跡・須恵器の変化と集落の相関は大筋において一致しており、生産の拡大と組織化に従って渡来人の分散が認められ、その痕跡はしだいに希薄な状況に転化していた。そして、TK二〇八型式段階を激減期として遺構・遺物から姿を消す傾向があった。しかし、

その後も渡来人の末裔はその痕跡を多少残しつつ、継続して活躍していたことは確実であるが、大方の場合は在地化した様相として表れる。逆に、長原遺跡ではTK二三型式段階に再び軟質系土器が増加する傾向があるといい（田中二〇〇三）、他の分野においては様相が多少異なる場合もありそうである。

渡来人の受容は、初現期の各地の須恵器窯やその他の遺跡でも窺えることであるが、陶邑窯のように当初から大規模に集中し、そして生産の拡大規模、継続性の違いは他とは比較にならない。この集中現象は手工業生産や生業に限定できるとは限らないが、そのあり方は手工業生産が製品の特色を含めて、内外的に重要な位置を占めていた証拠でもあろう。そして手工業生産の管理は、ヤマト政権や有力豪族によって政策的に行われたといえる。

規模の大小はあるが、こうした渡来人の活動は五世紀代の新たな文化の導入や生活様式の変化をもたらした。そして、渡来人を組み込んだ手工業生産は、雄略朝やその後の社会的組織の確立や政治的秩序の完成に寄与したと考えられ（植野一九九四）、その役割は非常に大きかったのである。特に五世紀代には、政治的手段の一つとして存在し、展開した。本稿は荒削りではあるが、渡来人の動向と手工業生産の展開からその一端を復元した。

［付記］　本稿は、二〇〇三年一〇月二五・二六日に滋賀県立大学で行われた、日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会の発表内容「陶邑と渡来人」（植野二〇〇三b・c）を基にして作成した。発表資料集では紙数の関係上、充分触れられなかった部分があったため、重複する部分もあるが、本稿で部分的に補足・改定して掲載することにした。

また、本稿を記すに当たり、岡戸哲紀氏には陶邑の集落遺跡の動向や各種の有益なご教示をいただきました。記して御礼申し上げます。

〈引用・参考文献〉

赤木克規・他　一九九二『小阪遺跡』（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会
石神怡・他　一九八四『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ（財）大阪文化財センター
植野浩三　一九九三a「日本おける初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』第二一号
植野浩三　一九九三b「初期須恵器窯総論―須恵器生産の開始と展開―」『第三四回埋蔵文化財研究集会　古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会
植野浩三　一九九四「古墳時代中期の手工業生産と政治秩序―須恵器生産の展開を中心にして―」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
植野浩三　一九九五「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第一三集　奈良大学文学部文化財学科
植野浩三　一九九八a「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財学報』第一六集　奈良大学文学部文化財学科
植野浩三　一九九八b「須恵器生産の展開」『第四四回埋蔵文化財研究集会　中期古墳の展開と変革―五世紀における政治的・社会的変化の具体相（一）―』埋蔵文化財研究会
植野浩三　一九九九「初期須恵器の構造的特徴」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
植野浩三　二〇〇二「TK七三型式の再評価―高杯の消長を中心にして―」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
植野浩三　二〇〇三a「日韓古代窯跡調査の動向」『総合研究所所報』第一一号　奈良大学総合研究所
植野浩三　二〇〇三b「陶邑と渡来人」『日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会発表要旨』日本考古学協会
植野浩三　二〇〇三c「陶邑と渡来人」『日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会資料集』日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会実行委員会
岡戸哲紀・他　一九九〇『陶邑・伏尾遺跡』A地区（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府

教育委員会
岡戸哲紀　一九九一「陶邑・伏尾遺跡の検討」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式系土器研究会
岡戸哲紀　一九九四「揺籃期の陶邑」『文化財学論集』　文化財学論集刊行会
岡戸哲紀・他　一九九五『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅳ（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会
岡戸哲紀・他　一九九六『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅴ（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会
岡戸哲紀・他　一九九七『陶邑・伏尾遺跡』ⅢＡ地区（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会
三宮昌弘　一九八九「初期須恵器製作集団と韓式系土器」『韓式系土器研究』Ⅱ　韓式系土器研究会
副島邦弘・他　一九九六『居屋敷遺跡』福岡県教育委員会
武内雅人・他　一九八七『近畿自動車道和歌山線建設に伴う　信太山遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会
田中清美　一九八九「五世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』第一二五号
田中清美　二〇〇三「摂津・河内の韓式系土器」『日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会発表要旨』日本考古学協会
田中英夫　一九九九『濁り池須恵器窯址』信太山遺跡調査団濁り池窯址班
田辺昭三　一九六六『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　一九八一『須恵器大成』角川書店
續伸一郎　一九九三「小阪遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第三四冊　堺市教育委員会
富山直人　二〇〇三「播磨における大陸からの渡来人」『日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会発表要旨』日本考古学協会
中村浩・他　一九七三『陶邑・深田』大阪府教育委員会
中村浩・他　一九七八『陶邑』Ⅲ　大阪府教育委員会
中村浩・他　一九八七『陶邑』Ⅵ　大阪府教育委員会
西口陽一　一九九四『野々井西遺跡・ＯＮ２３１号窯跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会
藤原　学　一九八六『埋蔵文化財緊急発掘調査概要』昭和六〇年度　吹田市教育委員会
富加見泰彦・他　一九八九『陶邑・大庭寺遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会
富加見泰彦・他　一九九〇『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅱ（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会
富加見泰彦・他　一九九三『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅲ（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会
宮崎泰史・他　一九九五『泉州における遺跡の調査』Ⅰ　陶邑Ⅷ　大阪府教育委員会
村上年生・他　一九八七『小阪遺跡』その三―調査の概要―（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会
森村健一・他　一九九二『陶邑・伏尾遺跡』ⅡＡ地区（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会